

## 第3分科報告書発刊に寄せて

日韓歴史共同研究委員会第3分科の報告書がついに両国語でまとめられ、提出に至った。日韓両国相互間の歴史的 Understanding を増進させ、今後のパートナー的な日韓関係樹立のため組織された共同研究委員会の目標が、ささやかながらも達成されたと考える。この3年間の困難な活動を振り返ると、これだけの成果を出せたことが幸いであるとも思う。

日韓両国の第3分科委員は、それぞれ5名で出発した。しかし、発足以後の短い期間内に、この分科の委員は大きく変化した。韓国側の金長権委員が他界した悲しみを分かち合い、研究委員の一部(姜昌一、兪炳勇、北岡伸一)は、それぞれの国の政治、外交の必要から委員の職を辞したということもあった。その結果、最終的には日韓両国各4名の委員でこの報告書を完成させた。

本分科は研究委員の数に比べ、研究主題が他の分科よりはるかに多かった。近現代の時期に日韓の歴史学界において解決しなければならない課題がそれほど多いことを意味するといえよう。そこで、本分科では両国の研究委員のほかに、研究協力者を置いて研究を進め、最終報告書には13の主題に両国それぞれの補論まで追加し、韓国からは15編、日本からは16編の結果報告論文が提出された。第3分科が実質的に活動したのが2年余りであることを考えれば、量的には相当な成果であると思われる。

第3分科の活動を回顧すると、まさに多事多難であった。会議の冒頭から主題の選定をめぐって両国間に少なからぬ対立があった。委員長の方科所属問題や、通訳の資格も問題となって、会議が中断したこともあった。そして、主題発表と討論過程において、激しい学術的論争もあった。出発自体が両国間の歴史認識の違いと教科書についての解釈と認識の違いによるものであったため、お互いに向ける視線が鋭くなるのは避けられないことだったのである。

このような紆余曲折の中でも、第3分科は合計14回の日韓合同会議と論文発表会、1回の中間発表会、そして最後に合同批評会を行った。この過程を通じて両国の委員と研究協力者は活発な

学術的討論を展開した。そのほかに、今回の合同報告書には反映できなかったが、史料調査と年表作成などの作業も並行して行った。このような活動のため両国の研究委員と研究協力者が精神的・肉体的に相当に困難な作業に耐えなければならなかったという点を指摘しておく。

本分科の共同研究過程を通じ、多くの成果もあった。歴史研究者の姿勢や資料に対する批判的アプローチなどから、多くの点で近づいた部分もあった。しかし、具体的な事実の解釈をめぐり、日韓両国の歴史研究方法、歴史認識において、依然として差異を見せた。例えば、東アジア国際関係とその近代化、日韓間の条約問題、植民支配と社会変化、1945年以降の日朝関係の諸問題などでは、それぞれ異なる立場を示した。このような違いは今後さらに密接な共同研究を通じて、解決されていくものと考えられる。

日韓両国の歴史研究と歴史認識が一回の共同作業で改善されるだろうと期待することはできない。頻繁な出会いと対話を通じてはじめて、切磋琢磨と相互理解の領域を少しずつ広げていくことができる。日韓両国の第3分科所属委員らは、出会いと対話の重要性をこの3年間で深く認識することができた。もちろんお互いの見解を全く受け入れられない部分も多く、反対に理解を示した部分も少なくなかった。何より日韓両国の学者たちがお互いの歴史認識に真摯に接近する機会をもち、それぞれの違いと共通点を知ることになったということが、委員会の最大の成果であるといえよう。この報告書はそのような成果と限界を多少なりとも表しているだろう。この報告書が今後日韓両国の「歴史対話」や、後代の歴史教育資料として活用され、よりよい日韓関係の構築に寄与することになれば幸いである。

2005年3月

日韓歴史共同研究委員会  
第3分科 研究委員一同